沖縄を愛した男は、首里城を救って「沖縄の恩人」と呼ばれ、その研究で残した資料が、再び首里城を救うことになった。

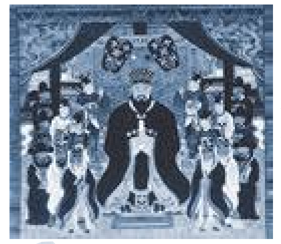
大正12年（一九二三年）教師として沖縄で二年間すごし、東京に帰った芳太郎は、東京美術学校の正木校長から紹介されて、東京帝国大学の伊東忠太教授と出会うと教授からその資料を絶賛され、師事することになりました。

翌年の三月、首里城正殿の取り壊しを知った彼は、すぐに伊東教授に相談。内務省を通じて、史跡名勝記念物として保存されることで、工事を中止させることになりました。このことで「沖縄の恩人」と呼ばれています。

その後、戦争で焼失した首里城を復元する際に彼が図面などを記録したノートや、かつて撮影した多数の写真が資料となって、再び首里城を救うことになりました。

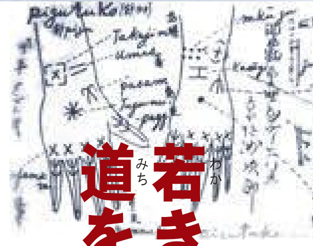
残念ながら彼は、没後に復元された首里城を見ることはできませんでしたが、首里城はさらに後に世界遺産として登録されました。

※資料の写真は、「沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵」



◀初代尚円王御後絵

首里城正殿・正面▶



◀宮古島の入墨

若き日の琉球文化の研究が、紅型の作家となる道を選ばせ琉球紅型の復興にも役立った。

※美術工芸見聞き写真（鎌倉ノート）

◀流水菊桜牡丹模様白地型紙

46歳の時、空襲で家も研究用の本も、全て火事で無くしますが、唯一残ったのが沖縄のノートと紅型の型紙でした。運命を感じた彼は、紅型一本で立ち上がることを決意して、琉球紅型の復元に取り組み、60歳を迎える頃に技術を完成させました。

やがて作品を次々に展覧会に出品して、75歳（一九七三年）で型絵染の重要無形文化財保持者＝人間国宝に認定されました。

一九七二年の5月15日に本土復帰した沖縄では、同時にその歴史を見つめ直そうとする運動が起こり、芳太郎がかつて撮影した大量の写真による〈50年前の沖縄＝写真でみる失われた遺宝〉展が開催されました。初日には一万人以上が入場し、会期は一週間も延長され、この展覧会の大成功で、琉球文化の第一級の研究者として、再び認められました。それから十年後、亡くなる一年前の83歳の時に「沖縄文化の遺宝」として資料をまとめた本が出版されました。

その一方で、『紅型は、沖縄の人によって受け継がれるものである』と考え、型紙などの多数の資料を沖縄に返還寄贈しています。それらが、琉球紅型の継承者の大いなる資料となって役立っています。

※「画像提供・香川県立ミュージアム」「肖像写真撮影／道岸勝一」

琉球文化研究の第一人者となった

三木町出身の偉い人

鎌倉芳太郎

かまくらよしたろう

22歳の男が、東京から沖縄にその一歩を踏み入れたのは、今から約90年前の一九二一年でした。

その男＝鎌倉芳太郎は、一目で沖縄が好きになりました。

沖縄の文化、芸術、民俗、建築など様々な分野に興味を抱き、教師として働くかたわら、いろいろな場所へ出かけてはそれらを克明に調べ、スケッチしてノートに記録しました。

足かけ七年をかけて調査したそのノートは、全部で81冊。沖縄研究の第一級の資料として「鎌倉ノート」と呼ばれて、千枚以上の写真資料とともに後に国の重要文化財に指定されました。

OKINAWA
NAHA

型絵染で人間国宝になった

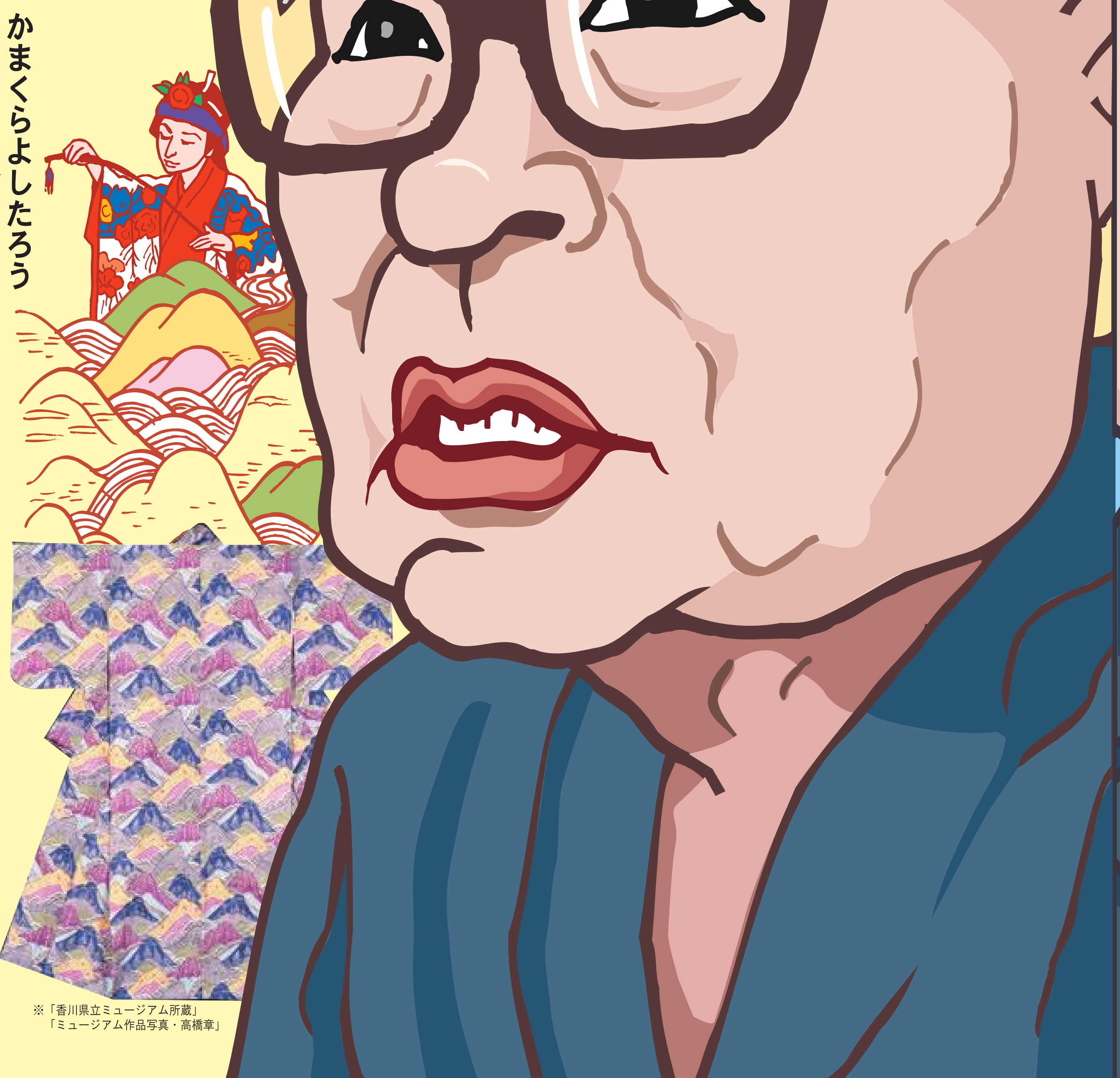
三木町出身の偉い人

鎌倉芳太郎

かまくらよしたろう

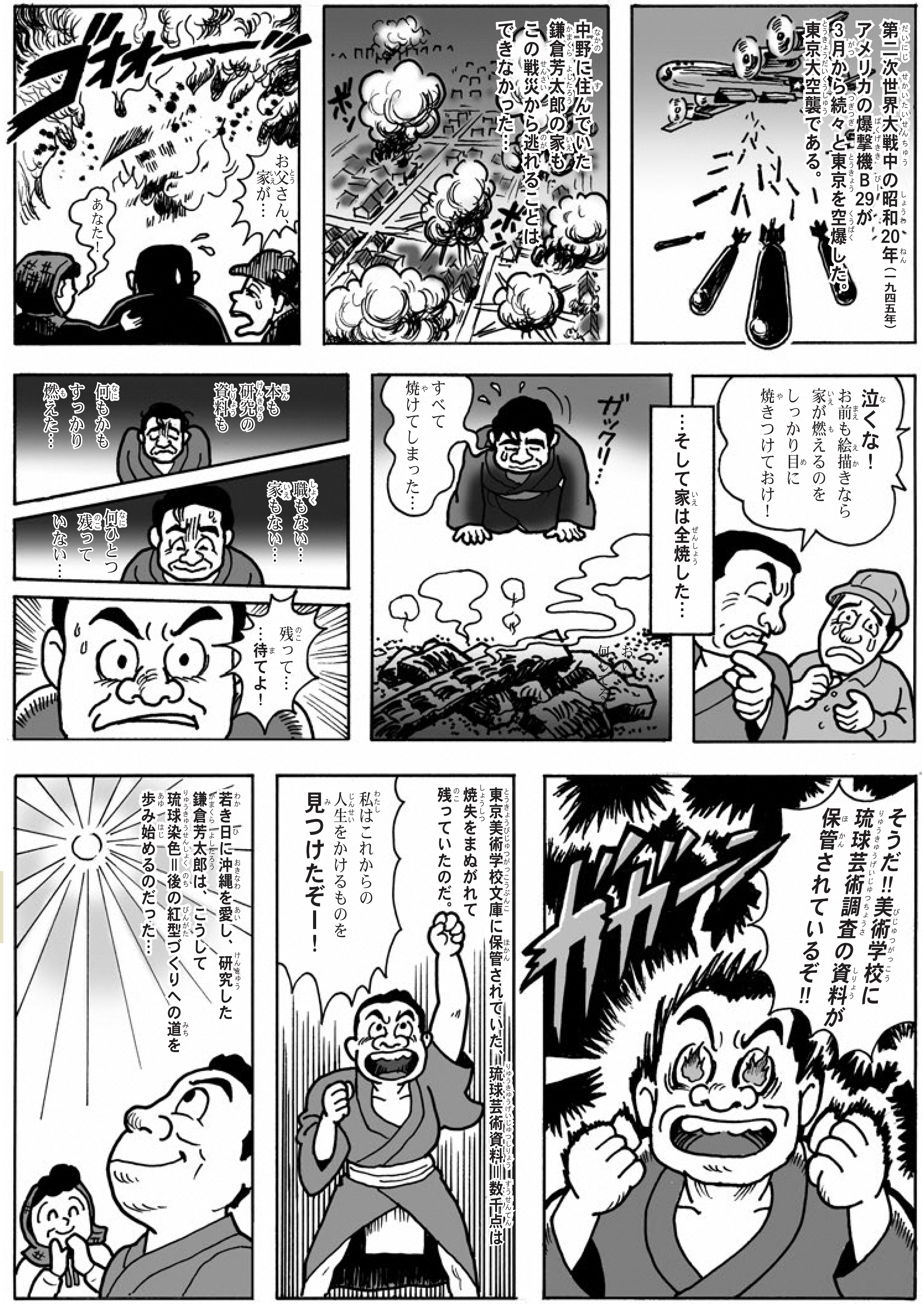
沖縄に伝わる美しい衣裳と紅型。その美しさに魅了された若き日の鎌倉芳太郎は、すたれゆく紅型を後世に残そうと熱心に調べました。

そして消えゆく型紙や布を大量に自費で集め、さらには廃業した職人からその染め方も学びました。後に資料を元に自力で復元しただけでなく、新しい創造性を加えて作品を発表し続けて、型絵染で人間国宝に認定されました。



※「香川県立ミュージアム所蔵」
「ミュージアム作品写真・高橋章」

全てを失った時、鎌倉芳太郎は新たな出発を始めることに…


第二次世界大戦中の昭和20年（一九四五年）アメリカの爆撃機B29が3月から続々と東京を空爆した。東京大空襲である。
中野に住んでいた鎌倉芳太郎の家もこの戦災から逃れることはできなかった…
ゴオォーー
お父さん、家が…
あなた！
泣くな！お前も絵描きなら家が燃えるのをしっかり目に焼きつけておけ！
…そして家は全焼した…
ガックリ…
すべて焼けてしまった…
本も研究の資料も
何もかもすっかり燃えた…
職もない…家もない…
何ひとつ残っていない…
残って……待てよ！
ガガーン
そうだ!!美術学校に琉球芸術調査の資料が保管されているぞ!!
東京美術学校文庫に保管されていた、琉球芸術資料＝数千点は焼失をまぬがれて残っていたのだ。
私はこれからの人生をかけるものを見つけたぞー！
若き日に沖縄を愛し、研究した鎌倉芳太郎は、こうして琉球染色＝後の紅型づくりへの道を歩み始めるのだった…

平成24年3月発行／三木町教育委員会　香川県木田郡三木町大字氷上310

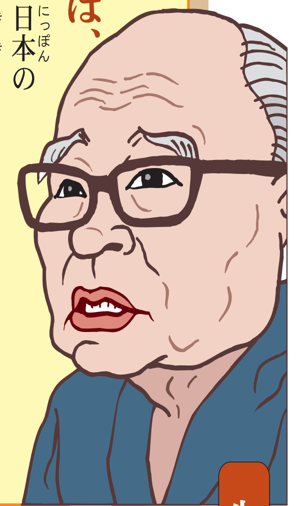
生い立ちと創作活動の足跡

今から120年前の日本は、

明治維新以降、日本の文化遺産は存亡の危機にさらされていました。神仏分離令が廃仏毀釈（仏教を捨て仏像などを捨て去る）の社会風潮を生んで、まさに文化遺産の危機であった。正倉院宝物はもちろん、全国の寺院宝物類は無価値で、捨て去るべきであると見なされ、大量の宝物や絵が欧米へ流出していった。

この頃、琉球の文化を知らない明治政府の上級官吏は、沖縄固有の文化も否定し、琉球は野蛮視され、音楽や伝統芸能なども劣等な文化であるかのように言いふらされた上に、母語（方言）まで強く否定された。

こんな時代に鎌倉芳太郎は生まれた。



10月19日、香川県三木町氷上長生で誕生

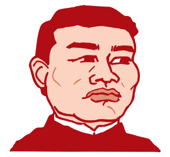
七歳で母を亡くす

父が事業を失敗、住まいを無くし伯母の家で育てられる

白山高等女学校の美術科教諭の江村清三郎から日本画法を習い始める

香川県師範学校本科第一部に入学

江村から狩野派の技法を、穴吹香村から運筆・写生の技法を習う



香川県師範学校を卒業し、東京美術学校・図画師範科に入学

卒業後、沖縄県女子師範学校、県立第一高等女学校に赴任

帰京、東京美術学校・研究科に再入学

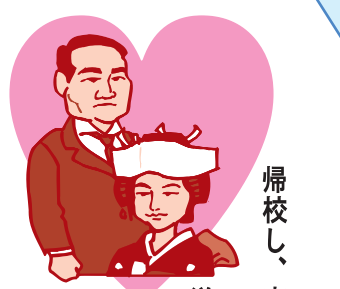
人との出会いが、進むべき方向を与える。

7歳で母を亡くし、父の事業も失敗。白山高等女学校で裁縫の教師をしていた伯母に預けられる。よく遊びに行っていた学校で江村清三郎に日本画の技法を習い、その後入学した香川師範学校では、穴吹香村に運筆と写生法を学ぶ。また小原國芳にも影響を受け、東京美術学校へ進学した。

16歳の時に見て感動した「琉球の花」の作者＝水上泰生を訪問し、図画教師を勤めながら琉球の文化研究や亜熱帯の自然を写生することを勧められる。沖縄行きは、赴任手当てが初任給百円と全国で一番高く、世話になった伯母への返金を多くしたいとの想いもあったらしい。さらに師事した日本画の平田栄二からは、奈良の古美術を見るように助言され、研究費の援助も受けて、沖縄行きの前に一ヵ月余り奈良に滞在した。

講演で「紅型」の呼名を使う

帰校し、東京美術学校の助手となる



洋画家山内静江と結婚

東京美術学校を退官

戦災で、自宅と蔵書と資料を焼失する

残った琉球芸術資料を見て、染色家として活動を始める

「琉球紅型」の実物大手彩色豪華本を完成させる

どん底からのスタートで一流の作家に…

48歳で戦災により家も本も全て焼失したが、母校に置いていた琉球芸術資料の数千点を基に、型絵染作家としてのスタートを決意。

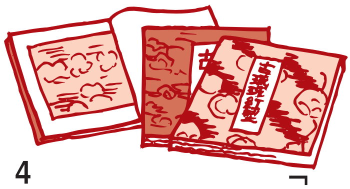
60歳で、第5回日本伝統工芸展に入選。以後毎回出品、入選を続け、本も出版した。

6年後には日本工芸会会長賞を受け一流の作家となる。本も「古琉球紅型・色彩編」「同・技法編」と刊行。作品と理論研究も進める。

そしてついに74歳の秋、日本工芸会総裁賞＝最高賞を受賞。翌年75歳で、重要無形文化財保持者＝人間国宝に指定されたのです。

第5回日本伝統工芸展に初出品

以後1975年まで毎年出展する



「古琉球型紙」全5冊を刊行する

日本工芸会の正会員になる

4月、勲四等瑞宝章を受ける

9月、第19回伝統工芸展で日本工芸会総裁賞を受賞

人間国宝（重要無形文化財保持者）に認定される

寄贈した資料で沖縄の紅型復興にも貢献した

戦災で紅型の資料が失われていた地元の染織家たちにとって、図案や色の貴重な資料となり、その復興に役立った。

8月3日、84歳で死去

（東京都中野区沼袋にて）

三木町の名誉町民として顕彰される

遺族が沖縄県へ芸術資料を寄贈する

三木町・山大寺池に鎌倉芳太郎顕彰碑が建立される

宝＝首里城を守った鎌倉芳太郎は、自身が宝＝人間国宝になりました。

0歳 1898

7歳 1905

15歳 1913

16歳 1914

20歳 1918

23歳 1921

25歳 1923

26歳 1924

27歳 1925

29歳 1927

32歳 1930

46歳 1944

47歳 1945

59歳 1957

60歳 1958

61歳 1959

63歳 1961

74歳 1972

75歳 1973

79歳 1977

83歳 1982

84歳 1983

1984

1986

1990

1992

2000

2005

2010

琉球芸術研究者としての足跡

人との出会いが、チャンスを与える。

沖縄では新たな交友を深めるが、出会った大切な人の一人が、下宿先の当時50歳の座間味ツルだ。幼い時に母を亡くした彼は、彼女を母のように慕い、ツルも我が子のようにかわいがり、古い形式の首里士族の言葉遣いを教わる。これが、後の調査研究に大きな影響を与えた。

校長より東京帝国大学の伊東忠太教授を紹介され、師事することになる

翌年3月、首里城正殿の取り壊しを知り、伊東教授に相談→内務省を通じて→工事中止。保存されることになる

琉球芸術調査事業のため、沖縄に調査・撮影に行く

鎌倉ノートの始まり

奈良の唐招提寺で興味を持った「唐大和上東征伝」やその他の解説書をノートに書き写したのが琉球研究の始まりとなった。

23歳で、沖縄県女子師範学校と県立第一高等女学校の二校の美術教師として働く。

ここでまばゆいばかりの色彩の沖縄の風物にすっかり心を奪われた彼は、ひまを見つけては、首里王宮や遺跡を見てまわり、歴史と芸術に興味を覚えて、写真撮影や文献調査を基本とした琉球芸術の研究を始めた。

この時、後に彼が「研究の恩人」と呼ぶ沖縄タイムス主筆の末吉安恭をたずねて、記事「琉球画人伝」と研究資料を書き写したのが、『鎌倉ノート』の始まりとなる。

型紙などの紅型資料600点を沖縄県に寄贈する

沖縄で、芳太郎が撮影した写真で「50年前の沖縄―写真で見る失われた遺宝」展が開かれる

石垣市の名誉市民として顕彰される

「沖縄文化の遺宝」が刊行される

首里城正殿が復元される

12月、首里城が世界遺産に登録される

寄贈資料の一部「琉球芸術調査写真」が重要文化財に指定される